

2×3 cm, 皮面より7 mm 隆起せる暗黒色腫瘍あり。皮膚と広基性に癒着, 弾性硬。表面は細顆粒状, 一部ビ爛し出血す。周辺皮膚は健常。軽度自発痛。左肘部小豆大リンパ節1コ。組織的に転移を認めず。胸レ線正常。組織像: 多量のメラニン含有せる紡錘形, 一部多角形の細胞が索状, 蜂巢状に配列, 真皮深層に下向性増殖。ドーパ反応, チロシナーゼ反応陽性。

治療・術前照射 + 左前腕切断術。

デルモパン, ステップ IV にて, 1,000 R 2回, 500 R 20回, 計 12,000 R 連日照射。

erosive Reaktion は 6,000 R で生ず。腫瘍軽度縮小。術後4カ月にいたるも転移を認めず。

討論

原: 診断的に melanoma は問題ないと思うが, 組織像中の異常角化像は melanoma cell の浸潤の中にとりのこされた汗腺の硝子化と解釈したい。

那須: 元来, 放射線感受性は低いと思うが, コバルト 60 針, またはラジウム針で Tumor-dose を 6,000~8,000 R にしたい。

5. カンジタ性肉芽腫 (Hauser-Rothman 型) に対する Amphotericin B の治療

岡本昭二・川瀬健二  
宮治 誠・木村英夫

13才女児。本症例は第9回日本医真菌学会総会ならびに第12回本例会に報告した。今回は治療に関して報告する。Amphotericin B 点滴静注法以外諸種治療全く効なく, 結局 Amphotericin B の点滴静注を初回量 0.02 mg/kg より始め, その著効をみつつ維持量を 0.5 mg/kg として 24回にわたり, 一週2回の間隔で, 総量 300 mg で1クールとして中止した。1クールで皮疹は全く治癒状態を示している。

6. Toxic epidermal necrolysis (Lyell) の一例 —Trancopal による薬疹—

加藤 友 衛

67才男子。農業。1965年4月6日より, トランコパールを服用していたが, 同17日に全身に紅斑出現, 19日に悪寒戦慄を伴って発熱。22日当科入院。入院時は全身に疼痛あり, 顔面はほぼ全体に暗赤色で, 口唇および口腔粘膜は一部はビ爛し, 一部

は白苔を付けている。頸~胸部は暗赤色で, 前胸三角部は表皮剝離し, 胸~腹部は小指頭大の暗赤色斑が, 一部は水泡となって播種状に認められる。背部は慢性に暗赤色で表皮が剝離しているところもある。陰囊は全体にビ爛, 四肢は胸部とほぼ同様の变化。組織学的には, 表皮は所々に基底層がみだれその周囲に空胞変性が認められ, エオジンに染まる homogeneous Masse が集っている部分もある。真皮は上層に軽度の血管周囲性細胞浸潤と浮腫がみられるのみである。治療 副腎皮質ホルモン, 補液で約1カ月に治癒した。トランコパールによる貼布試験陽性。

討論

竹内教授: 重症の薬物中毒と考える。

山崎: 解熱剤で同様のものをみている。第2度熱傷に相当する変化を示したが, 短期日で治癒している。

7. Congenital ichthyosiform erythroderma の一例

市川 浩

Nonbullous type に属する6才男子例を報告。各種角度より本症の発生機転, さらに Clinical entity に関して考察を試みた。検査上, 脳波異常, メコリル試験で P type 基礎代謝亢進など, 間脳系を主体とする中枢異常を認め, 中枢異常の関与も想定。また本症にみる dry skin および体温調節障害は, 角化異常による汗口の閉塞・局所汗腺の興奮性低下に起因する続発性変化と断定。本疾患の entity に関しては, ichthyosis vulgaris と keratoma palmare et plantare hereditarium との間に移行を示すものに, Vitamin B 群欠乏がさらに加味されて, 臨床形態を modify したものと考えた。Nicotinic acid および Vitamin B<sub>2</sub>, B<sub>6</sub> で治療の結果, 伸側魚鱗癬様病変, 手掌足蹠の角化肥厚を除き著明な改善傾向をみた。

8. Poikiloderma atrophicans vasculare (Jacobi)

田 辺 義 次

20才女子。初診 1965年6月3日。両親は血族結婚, その他特記するものなし。主訴は全身の色素沈着で, 3才頃にはじまり進行しつつ現在に至る。現